



# 文化の継承

その九 米づくり・農業



秋には黄金色の穂波が庄内平野一面に広がる

日本の米どころとして名高い庄内平野。言うまでもなくここ鶴岡は、米づくり・農業を基幹産業としています。今月は、県農業生産技術試験場庄内支場や県立庄内農業高校など農業関連施設、専門校が開設されている藤島地域を対象に、庄内の米づくりのために果してきた貴重な努力の足跡を辿って見ることにします。これまで、多くの人々が、様々な農業環境や技術を向上させながら「良い米を作る」という情熱を持って取り組んできて、今があると思うのです。

そこで今回は、庄内、藤島地域の米づくり・農業に詳しい、鈴木重雄さん、上林幹夫さん、佐々木茂吉さん、渡部幸一郎さん、富樫達喜さんにお集まりいただき、藤島地域エコタウン推進員の深澤昭吾さんの司会で藤島地域の米づくり・農業を中心に語っていただきました。

## 湿田から乾田馬耕法、 そして機械化へ

深澤 ここ藤島は、明治以降、東田川郡役所をはじめ、藤島税務署、藤島警察署など行政の中心的な施設が設置され、それに伴い庄内農学校（現・県立庄内農業高校）、県立農事試験場庄内分場（現・県農業生産技術試験場庄内支場）等も開設され、庄内の米づくり・農業の中心的地域であったと思います。

では「なぜ藤島は稲作なのか？」を解きますと、農業の歴史でも一大改革だった「乾田馬耕法」をいち早く積極的にやったことがすくなく大きかった。明治二十四年、田川郡会の決議に

よって乾田馬耕法を普及しようと、福岡県から島野嘉作氏を講師に迎えました。その方は大変熱意を持っており、「乾田馬耕法が地元の人々に受け入れられ、結果が出るには十年はかかるだろう。私はこれが普及するまで郷里に帰らない」という固い決意でここに来られたそうです。この改革が藤島の米づくりに大きな影響を与えたと聞いています。鈴木さんは馬耕による農業も経験されたと思いますが、当時の状況はどうでした？

鈴木 私は学校を卒業すると農業をやりました。当時は馬耕馬を使いました。冬の間、畜舎に閉じ込められていた馬を春の光と共に外に出すと、もうハッ



## 鈴木重雄氏

元農協職員  
元八栄島公民館長



## 上林幹夫氏

元文化財調査委員長  
伝統芸能保存会会員



## 佐々木茂吉氏

元県立庄内農業高校教諭  
農業関係誌編集長



## 深澤昭吾氏

(司会)  
市藤島地域エコタウン推進員



## 渡部幸一郎氏

県農業総合研究センター農業  
生産技術試験場庄内支場長



## 富樫達喜氏

因幡堰土地改良区理事長



見てきたと言えると幸いです。

### 苦勞の末、 完成した因幡堰

深澤 今、馬耕から機械化へと  
いう話をお伺いしましたが、米  
づくりは田を耕すことともう一  
つ、いかに田んぼに潤沢に水を  
引き入れるか、これが重要だと  
思います。水について富樫さん  
にお聞きしようと思います。

富樫 現在の赤川を水源とする  
庄内の農業水路の系統は、今  
から約四百年以上前にはほぼ完成  
されたと言われています。この  
幹線堰が完成すると、そこから

いわゆる支堰が網の目のように  
いるんな所に引かれ、それぞれ  
に新田が開発されていったんで  
す。今我々が見る南庄内の田園  
風景は、江戸時代の堰の開削が  
土台になっていると思います。

さて、この藤島地域を潤して  
きた因幡堰に目を向けますと、  
今から約四百年前の一六〇一年  
に山形城主・最上義光が、家臣  
の新関因幡守を藤島城主に配置  
しました。当時の藤島は、度重  
なる戦と百姓一揆などで形をと  
どめないほど荒廃していたと。

このような時期に新関因幡守は、  
地元民の長年の願いだっただ赤川  
から藤島領内に水を引く用水溝  
の開削工事、後の因幡堰の工事

ラツとして、その馬の勢いを抑  
えながら馬耕の緻おろしをする  
んです。緻おろしは二人でやり  
ます。緻頭が馬を引き、馬使い  
が後ろについて、二人がかりで  
馬を訓練するわけです。だいた  
い二反歩程が一日のノルマでし  
た。それから馬耕が終わると碎  
土をやり、土を返す、一番返し・  
二番返しを進め、そして代掻き  
までします。この作業を春先の  
節句のころから四月の末ころま  
でに終わらせるのですが、大変  
な忙しい作業でしたの。

深澤 上林さんは、馬耕から耕  
耘機への移行時期のあたりを経  
験されましたか？

上林 私は昭和三十一年に庄内  
農業高校を卒業し、農業を始め  
ました。まだ当時は馬耕が主力  
だったと思います。だんだん耕  
耘機も入り、今のようなロータ  
リー式の耕耘機ではなく、クラ  
ンク式やスクリーン式など機械  
に携わった最初の時代でした。

深澤 富樫さんが農業を始めた  
ころは馬耕というより、耕耘機  
やトラクターをもう使っていた  
と思いますか？

富樫 ちょうど近代的農業への  
足がかりという時代でした。三  
十年代に普及した耕耘機から、  
トラクターに変わる時代だった  
んです。近代的な農業を一から





豊栄にある水にまつわる石碑



5月、庄内平野でいっせいに田植えが始まる



座談会の様子

に着手しました。その後、最上氏の改易によって新関因幡守は庄内の地を去り、開削工事は中止を余儀なくされたわけですが、しかし農民は工事の続行を願う運動を絶え間なく続け、一六八九年に工事再開、一応の形は整ったのですが、急速な新田開発にはこたえられるものではありませんでした。そして一七〇五年に庄内は大干ばつに見舞われます。当時の藩主・酒井忠真は農民の苦しみを目の当たりにし、因幡堰の大改修を英断したようです。莫大な経費と数方に及ぶ人足によって、困難を極めた難工事も一七〇六年についに完成してあります。また、その後の改修工事の責任者であった大堰守の田沢勘七さんが「人柱となつて永くこの樋を守る」と遺言し水路橋の根元に自刃をはかったという逸話もあります。

鈴木 水で難儀した所は、水神つていう石碑作りしましたの。これは各地にあるんですか？

富樫 あります。何より大切な水をもたらししてくれる水神を農業用水の神として崇敬した。今も水神祭が執り行われています。

鈴木 それだけ水に願う気持ちが強かったと思うの。豊栄には大きい碑があるよの。そこは難儀したんだと思います。

## 米の集積地として活躍した藤島倉庫

深澤 ところで、藤島が米の集積地、流通拠点として栄えた象徴として藤島倉庫がありますね。

鈴木 昔、藩政時代は川舟で米を運んだけど、鉄道の時代になると、各地で競って鉄道の沿線に米の倉庫を建てたと。藤島駅近くにある藤島倉庫は今も活躍しています。この藤島倉庫は十四棟あり、酒田の山居倉庫の支庫として建てられました。米の収容、建物の床面積にすると酒田の山居倉庫の約二倍。あの倉庫群も藤島の特徴だと思っんです。当時、この藤島倉庫の米は山居倉庫の米と同じく市場性が高く、農家から集めた米をバラにして、もう一回袋に詰め直す。そつやって藤島倉庫の米は品質が一定で信頼できるんだよと全国に売り出しました。この米俵には、黒縄をかけたことから「黒縄の米」という名で全国に流通したわけですよ。

## 農家の願いだつた庄内分場の開設

深澤 また、大正九年に今の県農業生産技術試験場庄内支場が藤島に開設されたことも、地域の農業に大きな恩恵を与えたと

思います。渡部さん、当時、藤島に農事試験場が設置された経緯などをお話ください。

渡部 庄内支場は、山形県立農事試験場庄内分場として設立されています。当時は山形市の本場一か所だけで、内陸とは気象や土壌、栽培方法も違う状況の中、庄内の農家の「ぜひ試験場を設立してほしい」という気運が高かったと聞いています。また経費の大部分は、国の補助金と東田川郡の農家の寄付でまかされたようですよ、やはりこの地には農業に対する熱意な意欲や要望があつたと考えています。

当時、庄内の地域に合った栽培方法の試験を目的に水稲の採種圃を設けて始めました。昭和二年から二十年まで、いもち病防除の指定試験が続きます。これはこの地域が土壌的に飽海と比べ粘土含量が少なく秋落ちしやすい、いもち病が出やすかつたことから研究したようですよ。また、昭和二十二年から三十六年までは、ごまはがれ病の防除指定試験をしています。ごまはがれ病もこの地域で発生が多く非常に問題となつていたので。深澤 そついう点では、ここは必ずしも土壌条件では肥沃な土壌ではなかつた。よつて国の指定試験地になつたり、県の研究



現在、庄内支場で試験中の「山形97号」の生育調査の様子



今も米の集積地として活躍する藤島倉庫群



庄内支場には県内各地から農業関係者が視察に訪れる

をいち早くここで取り入れたりできた、これがこの地域にすく良かつたのだと思います。

## 米づくりにかけた篤農家たち

**渡部** また、品種改良、民間育種が、庄内は非常に盛んな地域であり、明治から昭和の初期にかけて篤農家と言われる皆さんが六十人を超えいろんな品種を作っています。全部で百六十種を超えているようです。その中で、最も有名なのは阿部亀治さんが作った「亀ノ尾」。これは明治二十六年に選抜を開始しました。コシヒカリやササニシキなどの先祖になっていて、おいしい米はここからきているのだと思います。佐藤弥太右衛門さんという方、この方が作った中で特に有名なのが「イ号」です。明治三十五年に「愛国」の自然雑種から選抜したようです。当時もち病に強いということでもれもかなり普及しています。また、鶴岡出身の方もたくさんいらっしゃいます。工藤吉郎兵衛さんという方は、大正四年に交配して「福坊主」という品種を作りました。これも非常に安定した生育で多収であったようですが、あと、農家の方ではないのですが、加藤茂苞さん。この方

は国の農事試験場畿内支場に勤められ、明治三十七年に日本で初めて人工交配による品種改良を始められました。

**鈴木** 篤農家と言われる人たちは、表には出なくてもそれぞれ品種改良をし、自分で品種を作つて頑張つてました。例えば、名誉市民の豊采の日向康吉さんの生家。その家では自分で生育のいい稲を抜穂して品種改良してました。その様子を私も見ております。

**渡部** 庄内支場では昭和三十九年から品種改良に取り組んでいます。やはり倒れやすい品種は栽培しづらいいので、なるべく倒れず、もちろん食味が良い品種を目標としています。ここで生まれた「はえぬき」は、県内の栽培面積の六割を超えて作られています。また、新品種候補の「山形九七号」。これを今、奨励品種にするため栽培マニュアルを試験しており、平成二十二年から実際に農家の方に作つてもらつて予定です。この品種も食べると非常においしい米です。ご飯にすると白さが際立ち甘みがあり、一粒一粒がしっかりとついていて粘りがあります。しかも倒れにくい特徴がありますので、「食べやすいものを」という伝統の中

## 恵まれた人を育てる環境

で生まれたのだと思います。

深澤 おいしい米のルーツをたどると、古くは庄内の民間育種家たちにたどり着きます。それだけ米づくりに情熱を持って取り組んだ人がこの地域に多くいらっしゃつたんですね。こういつた米づくりへの情熱を受け継ぐ人づくり・教育は、庄内農業高校があつたということも大きかつたと思います。

**佐々木** 今お話されたように、この地域には人の利があつたと思います。農家の方が品種改良をするという意欲や取り組みが、庄内では他地域に比べて旺盛であつた。そういった人材を育成するのが庄農だつたわけです。ちよつと紹介しますと、昭和八年に現在の校歌ができました。私も大変すばらしい校歌だと思つているんです。校歌の一番に、「民の糧」という一節があります。これは農業が揺らぐ時は国が揺らぐ時だ。農業は国の基本であり、その精神と農業者としてのプライドを失つことなく庄内一円の糧を支えてきたことが校歌の一番に込められています。それから二番にある「浩然の気」。浩然の気とは自然の中でのびの



## 解説

乾田馬耕法…従来の田に常に水を張る湿田での稲作から、乾田で馬を使って田を耕す方法。これによって、米の収量・品質が格段に上がった。馬耕法の先進である福岡県勸業試験場の島野嘉作氏に指導を受けた。

秋落ち…収穫期前、急に稲の生育が落ち、収穫が減少すること。

抜穂…稲の品質向上を図るために、採種用として優れた形質を持つ穂を抜き取り保存すること。

阿部亀治氏…旧大和村（現庄内町）出身。明治二十六年、冷害にあった冷立稲から数本の突った稲を見つけ育成し、優良品種「亀ノ尾」を作った。

佐藤弥太右衛門氏…旧東郷村（現三川町）出身。いもち病に強い「イ号」を作った。

工藤吉郎兵衛氏…旧中野京田村（現鶴岡市）出身。「福坊主」のほか、酒米も手がけた。佐藤弥太右衛門らと共に、加藤茂苞から技術を習得した。

加藤茂苞氏…現鶴岡市出身。東京帝国大学農学部卒業後、農事試験場に勤務。品種改良に尽力し「東北稲作改良の父」と呼ばれる。若勢…主に集落の若者や青年男性を指す言葉。

一番獅子…獅子踊りは、一番獅子を指す中獅子を中心に、牡獅子、牝獅子、俱の牡獅子（旗獅子）、白鷺の五頭からなる。



藁細工づくり体験の様子



添川両所神社御獅子舞

びとした気持ちで農業に取り組む心。農業に対する若い情熱、新しい時代を担う向学心を後世にも残そうというのが一番です。それから三番にある「向上の道」。常に向上心を持ちながら、庄内あるいは日本の農業の食糧の安定供給を図っていかうという思いが込められています。明治・大正・昭和・平成の時代を一貫し、庄内唯一の農業高校として地域に支えられながら、農業の担い手育成と地域経済の発展に尽くし今に至ると思えます。

深澤 庄内分場にも修練生の養成施設があり、この地域は人づくりのための環境は恵まれていましたね。

渡部 庄内分場の修練生養成事業は昭和十六年度から四十六年度までの三十二年間行っています。これは農業の後継者の中核となる人を養成するためのものでした。期間は一年だけのようですが、技術の習得はもちろん心身の鍛錬も目的に、中学卒業後一年間泊り込みで勉強したと。修了者数は五百四十七人おり、地域の農業の中核となって活躍されているようです。鈴木 そこを修了した子供たちは家に帰ってから農業しても、やっぱり意欲が違うもんだっけ。礼儀も筋が通っているの。

深澤 当時の農家の本当の後継者というか中核でしたの。

佐々木 庄内、藤島がこれだけ農業・米作地帯として発展してきたのには、庄内の気質があると思うんです。「沈潜の風」という言葉があります。普段は静かに堅実に努力し、いざという時にそれを大いに発揮するという気質を持っているのが庄内人だと。これまでのたゆまぬ努力の中で多くの先輩諸氏が生まれた。そういう土壌があったと思います。

### 大切にしたい藁文化 獅子踊りの伝統

深澤 一人一人の努力ももちろん大切ですし、特に米づくりは様々なことが自分一人ではできないものだから、地域の人とまとまることも大切だと思っています。鈴木さん、ぜひ昔の若勢の藁細工の話をお聞かせください。鈴木 藁はとにかく生活には欠かせない必需品でした。昔は集落の中の集まる家が決まっています。夜になると藁をもって若い人たちが集まるんです。そこで先輩から技術を学びました。村の先輩たちと雑談をしながら藁の仕事をします。若い人がいろいろの知識を得る場所でした。また、昔は新しく雇われる家に行く時に自分の作った藁細工をお土産

に持って行くならわしがあつたんです。いろいろにかけられるカギノハナや、庭を掃くときのほうき、ナデと言いますけどの。それが自分の腕前を示す場でした。「私はこのくらい腕前があんなだよ、手先が器用だよ」と表す唯一の作品だったと思います。深澤 米を入れる俵も作りましたよ。

上林 俵は後から検査があつて、上手に編まないと検査に通らななんだよ。きれいな俵はどこまでもきれいで先輩方から一生懸命習ったの。藁もいもち病にかかった藁ではだめなんだよ。

佐々木 いいものがないし、俵もいいものがないですね。深澤 もう一つ、藤島は「獅子の郷」と呼ばれるほど獅子踊りや神楽も特徴だと思っただけ。上林 獅子踊り、神楽など伝統芸能について藤島の町内を調査したことがあります。獅子踊りは、添川、東堀越、無音、大川渡、谷地興屋、渡前、須走、小中島、八色木、豊栄と、今も多くの所で継承されています。もともと獅子は田畑を荒らす悪いものとされていましたが、その反面、獅子には悪霊を鎮める力があると信じられていたんです。それで獅子を祀ると改心して、農耕



中学生の田植え体験の様子

の守り神となり、悪疫退散、五穀豊穡に力を尽くすとされまし  
た。また、集落を一つにまとめるには、こういう行事が一番効果があり、若い人をまとめる力があつたので、村々に広がっていったのだと思います。

**鈴木** 若い人には「五人のうち  
の一番獅子になりたい」という  
競争心があつたの。それは集落  
にとつて非常にいいことだし、  
獅子踊りは秋作業に備えて体を  
鍛える場でもあつたと思うの。

**富樫** 獅子踊りも薫文化もなぜ  
藤島でこれだけ栄えたかという  
のは、やっぱりここは全国的に  
みて豊かな農村だったんだよな。  
その豊かさから獅子踊りも継承  
する余力があつたんだらう。

**鈴木** 農業ってのは集落単位、  
共同でないとできないことがい  
っぱいあるんだやの。こういう  
文化も現在、薫工芸部会や各地  
域の獅子、神楽の保存会が頑張  
って継承しています。

## これから、 米づくり・農業を

**深澤** 庄内、藤島にとつて、米  
づくり・農業は多くのものをも  
たらし、たくさんの方の努力や  
情熱のもとに発展してきており、  
時代が変わっても頑張つて取り  
組んでいきたいですね。

**鈴木** 農業の歴史をみると、昔  
から厳しい時代の面もあり  
ました。いい時と悪い時があ  
り、今は厳しい時代と言われ  
ていますが、諦めないで希望を  
持つて、ここで農業を続けてもら  
いたいというのが私の願いです。

**佐々木** 不易流行という言葉が  
ありますよね。時代の変化に  
対応することは極めて大事なわけ  
で、農業も時代の変化とともに  
変貌をとげてきました。しかし、  
農業の根本は変わらないと思  
います。農業をやる上で、人づく  
りと土づくり、この両輪が大切  
です。人づくりについて教育的  
な観点から言えば、農業をとお  
してまず頭に知識を身に付けて  
考える。次に、手に技術を身に  
付ける。そして、実践をする心  
を磨くことですね。また土づく  
りについては、いつの時代も土  
が作物を作る基本だと思えます。

将来的には、例えば今、水田の  
有効利用と言われるバイオマス  
を活用した薫によるエタノール  
の製造等、将来をきちんと見据  
えて多様なニーズに応えられる  
ように、これからこの地域が  
米づくり・農業をリードして取  
り組んでいけたらと思います。

**渡部** 歴史的にもこの地域は、  
乾田馬耕法をいち早く取り入れ  
たり、新しい品種を民間育種し

たりと、非常に意欲が高い地域  
だと思えます。そういう情熱は、  
ぜひとも引き継いでもらいたい。  
先ほど昔から藤島倉庫に集まる  
米は品質に信頼があつたという  
話がありました。これからも  
ここで作る米は喜んで買っても  
らえる、安全安心でおいしい米  
という自信をもって頑張つてい  
ただければと思っております。

**富樫** 先人たちの努力によつて  
開発された水田と水利施設は、  
食糧生産の資源であると同時に、  
環境資源でもあります。十九年  
度からは「農地・水・環境向上  
対策」もスタートしていますし、  
地域の皆さんと一緒に、因幡堰  
を活用した環境社会、循環型社  
会の構築や持続可能な農業の発  
展にも努めていきたいですね。

**上林** 庄内の田園風景は美田と  
言われます。この澄んだ空気と  
水、そして米どころとして豊か  
な環境をこれからも存続してい  
けるように、将来にわたつて子  
供たちにつなげていけるように  
みんなで努力をしていきたいと  
思います。

**深澤** これからも、この地域が  
庄内の農業の中心的役割を担っ  
ていく、そういう気持ちを持ち  
ながら進んでいきたいですね。

本日はありがとうございました。  
一同 ありがとうございます。